
残されたもの

百瀬 和海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
残されたもの

【Nコード】
N5445G

【作者名】
百瀬 和海

【あらすじ】
今し方まで、確かにそれは「ミヨ」だった

残されたもの

今し方まで、確かにそれは『ミヨ』だった。

いや、ミヨなどという友達是最初からいなかったのかも知れない。その可能性も完全には否定できなかった。完璧に否定できるだけの材料をわたしは持ち合わせていないのだから。

わたしは寂しさのあまり、体をブルブルと小刻みに震わせた。きつと今のわたしの顔は血の気が引いていて、幽霊よろしく土色となっているに違いない。

どうしてこんなことになってしまったの？ 落陽色に染まる腕にこびり付いた真つ赤な鮮血を見つめながら、わたしはミヨがいた頃を黙想し始めた。

きっかけはタクミ君の話からだった。わたしはミヨに相談をしたのだ。どうすればこの胸の痛みが治るのかと。

それは恋の病だよ、とミヨは言った。だから胸がズキズキと痛むんだよ。その病を治すには、タクミ君に想いを告げるのが一番だよ。でも当時のわたしにはそれを受け入れられるだけの心の余裕がなかった。恋患いを認めたことで、自分の頭の中の誰にも知られたくない秘密の部分が、周りの人間から覗かれるようになってしまうのではないかという気持ちがあったのだ。わたしはミヨの言うてくる恋患いに関してのことを全て否定した。

ミヨが更にそれを否定し、わたしがまたそれを否定した。その時はもう放課後になっていて、わたしたちの時間を縛り付けるものがあったので、そんなやり取りが延々と繰り返された。まるでいたちごっこだった。段々怒りがたぎってきたわたしはミヨを思い切り罵倒し、唇を堅く結ぶ彼女を無視して下校した。

ミヨは元来わたしに対して粘着質なところがあった。わたしとミヨの間で何かいざこざがあると、ミヨはわたしにしつこく付き纏っ

ては説得を試みていた。それはミヨの寂しがり屋な性格が起因していたのだろう。

タクミ君の件で怒ったわたしがミヨを置き去りにして一人帰路についていた時も、やはりミヨは後から追い掛けてきた。

本当にごめんなさい。わたし、悪気があつたわけじゃないの。頭を深くと下げながらミヨは言った。その時わたし達は校門を越える寸前のところで立ち止まっており、通り過ぎていく生徒たちは皆して汗を大量にかきながら息を弾ませるミヨを横目で見ていった。何だかミヨがさらし者にされているようで、わたしは彼女が可哀想に感じた。

「別にもういいよ。今日はちょっと機嫌が悪かつただけ。わたしこそ取り乱しちゃってごめんなさい」ミヨとの関係にひびを入れたくないのでわたしも謝った。

本当に許してくれる？ ミヨは餌を貰おうと媚びる犬のような表情になっていた。ミヨの顎から滴った汗がコンクリートに斑点模様をつくっていた。もうわたし達、今まで通りの友達だよな？

わたしはそんなミヨの顔を見て、瞬時に彼女の瘦躯を力一杯に抱きしめた。彼女が走って汗だらけになっていることなど、もうすっかり忘れていた。「うん、ミヨ、大丈夫。大丈夫だよ。わたし達はいつまでも一緒だよ」

ありがとう、わたし、とても幸せだよ。ミヨは汗に加えて今度は涙を流し始めた。ミヨはわたしの為に沢山の体液を内から外へ出した。わたしはそんなミヨが愛おしくなつて、再び強く抱きしめた。

その日はそのままミヨと一緒に下校した。竹下通りのクレープ屋に行き、二人でお揃いのクレープを食べた。「チエリーマルニエ」というものを使つたらしいクレープシュゼットはとても高かったけど、桜桃の味がよく染み込んでいて美味しかった。高いいだけあるね、とミヨと二人で頷き合った。

その後、電車通いのミヨは改札機を越えて雑踏の中に消えていっ

た。その際、ミヨが手を大きく振ってきたので、わたしも手を精一杯に振った。ミヨはわたしの方を向きながら後ろに歩いているので、人にぶつからないかと心配だった。

ミヨの姿が無事人混みに紛れたのを確認し、わたしは安堵と充実感の息を吐いた。いつまでもこんな日々が続けばいいなと思った。

タクミ君のどんなところを好きになったの？ 弁当箱に入っていたテリヤキソース入りのチキンマヨネーズカツを頬張りながらミヨが訊いてきた。

その時は昼休みで、わたしとミヨは机を向かい合わせながら二人で昼食をとっていた。そんな席でミヨが唐突にわたしに尋ねてきたのだ。わたしはミヨの問を照れながらもしつかりと答えていった。前日の件でわたし達の絆は確固たるものになっていたので、タクミ君の話題になっても幾分か冷静な対処ができたのだろう。

やっぱり顔が好みだったのが大きいんだね。ミヨがミニトマトを刺した箸の先端を口の中に入れた。それはそうだよ、性格も勿論大事だけど、顔が良いに越したことはないもんね。更に性格も良ければ儲けものだよね。ミヨがうんうんと頭を前に振りながらウインクをしてきた。

そうそう、とわたしは大袈裟に頷いた。ミヨとわたしの性格は正反対だ。とても熱があるけどその幼稚なところもあるミヨに対し、わたしはどこか冷めているところがある。人によってはそれを冷静沈着と呼ぶけど、帰するところは根暗なのだ。わたしは思っている。とにかくそんな正反対なわたし達だけど、恋愛観だけは割と似通っているところがあった。

それがわたし達を堅く繋ぐものだと思っていたけれど、同時に、真つ二つに引き裂いてしまう可能性を秘めた凶器でもあるのではないかとわたしは懸念していた。

コンビニで買ったおにぎりと菓子パンを食べ終わるとわたしは教室の後ろのゴミ箱にそれらを捨て、ロッカーから体操服の入った袋

を取り出し、教室を後にした。勿論、ミヨも一緒に廊下に出た。わたし達はいつでも一緒なのだから。

今日の体育、お昼ご飯の直後でしかもマット運動だから嫌だなあ。サボっちゃおうかなあ。ミヨが口を尖らせながら言った。彼女の華奢な肩にぶら下げられたジャージ入りの袋はピンクのビニールに熊のイラストが描かれた可愛いものだった。わたしはミヨの所有物であるそれをずっと熟視していたので、前から歩いてくるタクミ君に気付いていなかった。

前からふらつきながら歩いてくるわたしに注意してタクミ君は横に避けようとしたけど、わたしはそれを上回る酷いふらつき方をしていたので、見事にタクミ君に衝突してしまった。

タクミ君は小さく声を出して一瞬ぐらついた程度だったけど、わたしはタクミ君の岩のように固い胸板に弾かれ、勢いよく尻餅をついてしまった。タクミ君の周りの男子もあつと声を出した。

「あ、大丈夫か？ 立てる？」タクミ君は心配そうにわたしに手を差し伸べてくれた。当然、わたしは頬を紅潮させながらその大きな手に掴まった。するとわたしの腕が抵抗不可能な物凄い力に引つ張られ、わたしは半強制的に立ち上がらされた。

タクミ君の側にいる男子たちがわたしの足元をずっと見ていた。わたしがそちらに視線を向けると、彼らは一様に何事もなかったようにタクミ君の方を向いた。タクミ君に比べてなんて下品な連中なんだろうとわたしは思った。

「なんかふらついてたけど、調子悪いのか？」タクミ君がわたしの顔を見つめて言った。

「ううん、大丈夫だよ。ちょっと余所見していただけ。本当にごめんなさい、今度から気を付けます」

「そうか、元気なら良かった。ぶつかったことは別に気にしてないからな」タクミ君はわたしに対して微笑み、そのまま友達と廊下を歩いていった。

わたしは手に残る温もりを握りしめながら、タクミ君が廊下の死

角に消えるまでを見つめていた。温もりはいずれなくなってしまうので、わたしは目を瞑ってその感覚を身体に染み込ませようと努めた。けれど、それはどこか遠い場所へと飛んでいってしまった。

タクミ君、格好いいね。ずっと黙り込んでいたミヨが今頃になって言った。あれはライバル多そうだから、かなりの覚悟が必要だろうね。

「うん、きつと激戦だね。わたし、精一杯頑張るよ」

でもさ、タクミ君に体調のこと聞かれた時に元気だなんて言わずに頭が痛いんだ、とか肯定しておけば良かったのに。勿体ないことしちゃったね。

「え？」わたしは意図が分からず、目をぱちくりとさせた。

体調悪いと言っておけば、もしかしたらタクミ君が保険室まで付き添ってくれたかも知れないよ。彼ならそういうこともしてくれそうだし。

「ああ、その手があったか……」わたしは意表を突かれて口を半開きにしていた。ミヨはいつもわたしの気付かないことに気付いてくれる。逆にわたしはミヨの気付かないことを気付いてあげられる。性格が正反対だからこそ為せる技なのだ。

タクミ君とわたしはクラスが違う。番号が一つ違う上に教室のある階まで違うときている。隣合っているというのに、二つの間にはとてつもなく広い距離がある。数字が一つ違うというのは残酷なことなのだ。自宅の枕を何度濡らしたことが知れない。

そんな頃にわたしはミヨと出逢った。きつかけだとかどちらから声を掛けたかなどは全く記憶に残っていない。ミヨに出逢えたという出来事が、嵐になってわたしの頭の中の部屋を通り過ぎていったのだから。

問題はね、とミヨが右の人差し指だけを立てた。タクミ君とあなたとの間に何の共通点もないこと。これじゃあ恋は実らないよ。

「うん、分かつてる。さつきのは絶対的な好機だったのに、わたしは無駄にしちゃったんだよね」その時のわたしは抑揚のない話し方をしてた。わたしはすぐにでも泣き出しそうだった。

タクミ君は生きてるしあなたも生きてる。チャンスなんてこれから先、幾らでもあるよ。ミヨが諭すように言ってきた。

そんなミヨの優しさにわたしはせききったように泣き出し、体操服の袋を放り投げて彼女に抱きついた。

もう、女の子に抱きついてても仕方ないでしょ。タクミ君にこうやって抱きつけるように頑張りなさいな。ミヨはわたしの頭をそっと撫で、まるで子供をあやすみたいに言ってきた。

泣きべそをかいてる姿を人に見られるなど何年ぶりだろうか。わたしの記憶によれば、最後は小学校三年生くらいだった。ミヨにはわたしの弱いところを堂々と晒せられるのだと再確認した。

ミヨの言っていた通り好機はやってきた。それもタクミ君と衝突してから僅か十日後のことだった。

その日はミヨと一緒に休日のショッピングモールを楽しんでいた家が裕福でなければバイトをしている訳でもなかったので、わたしは殆ど何も買わずに商品を見ているだけだった。基本的にショッピングモールは買い物をする以外に楽しめる方法がないけれど、わたしはミヨと一緒にいられるだけで満足していた。

買うわけでもないのにお洒落な服をたくさん試着してみたり、香水やコスメを見て回った後、わたし達はフードコートに足を運んだ。わたしはお好み焼きを食べ、ミヨはドーナッツと三段重ねのアイスクリームを食べた。

二人とも食事を済ませ、雑談もほどほどにしてそろそろ席を離れようかとした時だった。「あれ」と背後から男声がした。ラーメンの大きなお碗を持つタクミ君がそこにいた。

「あ、この間はどうも。今日はひとり？」わたしは訊いた。

「いや、友達と来てるんだ。今は注文していたラーメンをテーブル

に持っていくところだ」

「あのさ、迷惑なのは承知で言うんだけど、ご一緒しちゃ駄目？」
人見知りなわたしにしては上出来な発言だった。ミヨに言われた「
好機」をしっかりと思い出していたからだろう。

「ああ、良いぜ。俺も色々と話してみたいと思ってたんだ」タクミ
君がやんわりとした表情で言った。「男友達が三人いるんだけど、
それでも良いか？」

「はい、全然大丈夫です」わたしは緊張した声で素早く返事した。
わたしは嬉しさのあまり、涙腺に熱いものを零してしまいそうにな
った。

ミヨはそんなわたしをにやにやしながら見ていた。ちょっと用事
思い出しちゃったから、わたしは先に帰ってるね。そう言っ
てミヨは小走りにフードコートを後にした。わたしはミヨに感謝し、タク
ミ君の後に付いていった。

タクミ君の友達のいるテーブルまで辿り着くと、皆して「おいお
い、いつからタクミの彼女になったんだよ」と茶にしてきた。タク
ミ君は照れくさそうにしながらそれを否定した。わたしは否定も肯
定もせずにただ黙っていた。

わたしはかしくこまった感じにタクミ君の隣の椅子に腰掛けた。周
りは以前タクミ君と衝突した時と全く同じ人達だった。彼らは石焼
きビビンバや炒飯、餃子などを食べながらわたしとタクミ君の関係
についてたくさん問い質してきた。

その度にタクミ君は冗談混じりに否定し、わたしは笑って受け流
した。まるで本当に周りに付き合っているのがバレないように努め
るカップルみたいで、わたしは嬉しかった。タクミ君もそうであっ
たら良いのにと、わたしは欲張りな期待もした。

それから、タクミ君やタクミ君の友達とメールアドレスを交換し
合った。タクミ君の友達のアドレスなんか要らなかつたけど、断る
訳にもいかなかったので一応アドレス帳に登録しておいた。

その日からわたしとタクミ君は頻繁にメールでやり取りをするようになった。タクミ君は男の子なのに意外と絵文字を多様するので驚いた。でもわたしはそれを気持ち悪く思うことなどなかった。

わたしは雑誌などから流行りものの情報をいち早く入手し、タクミ君とのメールで話題に出した。メールアドレスを交換してから一ヶ月が経った頃には、わたしとタクミ君は二人だけで映画を観に行く程にまでなっていた。

その頃からミヨと一緒に休日を過ごす回数が減った。それでも平日なら学内外問わずにわたし達はいつも一緒にいたので、別に何の問題もないだろうとわたしは高を括っていた。

しかし、ミヨの寂しがりな性分がそれを許す筈がなかった。わたしのこと、嫌いになっちゃったの？ ある日、ミヨが電話で尋ねてきた。

ミヨは今のご時世には珍しくメールができない。携帯電話は流石に持っているけど、メール機能は外してあるのだ。家が貧しいわたしでさえメール機能くらいは付けているというのに、どうしてミヨは付けないのかと訊いてみたことがある。だけど、ミヨはチンプンカンプンなことを言っただけ、その話題を逸らしていた。

「何言ってるの、わたしがミヨのことを嫌いになる訳がないでしょ」
今度はわたしが子供をあやすように言った。

「ごめんなさい、と携帯電話の先から蚊の鳴くような声がした。わたしだつて分かってるんだ。でも、あなたがどこか遠くに行ってしまう気がして。わたし、不安で仕方ないの。」

わたしは徐々に苛立ち始めていた。「ミヨはわたしとタクミ君が付き合うのを阻止したいの？」

そんな酷いことは企んでないよ。ミヨの語尾が強まった。でも彼女の声は悲しげだった。わたしはいつだってあなたの幸せを望んでいる。だから、あなたはわたしのことを求めて。いつでも側において欲しいって、願って。

「煩い！」わたしは自然と怒声を上げていた。携帯電話を握る手に力が入る。「女の子が男の子を求めるのは当たり前のことでしょう？わたしは本能に従っているだけなの。だから、わたしに文句をいう筋合いなんかあんたにはないの。もうわたしに関わるな！」

「ごめんなさい、本当にごめんなさい。携帯電話越しではあつたけど、ミヨが泣いているのがすぐ分かった。ミヨが叫ぶように様々な言葉を発していたけど、もうそこからは激しくしゃくり上げていて何を言っているのか聞き取れなかった。」

ただ、ミヨが『見捨てないで』というニュアンスのことを言っているのは分かった。わたしはそんなミヨに対し、通話を切るという対処をした。

次の日、教室にミヨの姿はなかった。わたしは怒りのあまりミヨに何て不人情なことを言ってしまったのだと後悔した。休み時間になってミヨの携帯電話に電話を試みるも、「この番号は現在使われておりません」というアナウンスが流れた。わたしはいたたまれなくなって教室を颯爽と飛び出した。

昼休みと違って僅か十分の休み時間だったので、下駄箱周辺にはこれから体育の授業に向かうであろうジャージ姿の生徒たちしかいなかった。ジャージ姿の生徒たちが制服姿のわたしをじろじろと見てきた。何も悪いことをしていないのに、わたしだけが場違いで侮蔑されているようだった。

下駄箱の真つ正面の校門は閉められており、隅には見張り番の教師が一人立っていた。わたしはそれを見てようやく沈着し、自分が軽躁けいそうなことをしていると認識した。

わたしはミヨの家を知らなかったのだ。ミヨは今までの電車に乗ってどこへ向かっていたのだろうか。わたしには全く分からなかった。わたしとミヨを繋いでいた糸は想像以上に軟弱なものだったのかも知れない。

それから二週間ほどしても、教室にミヨの姿を発見することは叶わなかった。わたしを除外し、学級は不思議とそれで成り立っていた。誰もミヨを案じたりなどしなかった。まるで、ミヨなどという少女は最初から存在していなかったかのよう。

しかし、わたしにはそれを否定することはできなかった。否定するには確実な材料が必要であり、わたしの掌には蒸発していった過去の残滓ざんししかないのだから。

わたしにできることなど何もない。わたしはただミヨが平然とした顔で教室にいるその時を待つしかないのだった。

ミヨを失い、わたしにはもうタクミ君しか頼れる人間はいなかった。タクミ君とは依然、メールでのやり取りや休日のデートが続いていたけれど、放課後のお供は拒絶されていた。

タクミ君曰わく、「学校では同性の友達を大事にしたい」とのことだった。その気持ちはわたしにもしみじみと理解できた。ミヨとの日々がそれを証明していたのだから。だけど、墮ちてしまったわたしにはタクミ君がどうしても必要だった。

だからタクミ君とタクミ君の友達を切り離してしまおうと思った。わたしがミヨを損失して色狂いろきちがいになってしまったように、タクミ君も友達を失えば色好みになって、わたしを激しく求めてくれる筈だと。

タクミ君の友達に片っ端からメールを送ってみた。今まで全くやり取りをしてなかったものだから、皆驚いたという主旨の返信をしてきた。それでもしつかりと三人とも食いついてきた。タクミ君を含む四人の男性とのやり取りが始まった。

その内の一人とは夜を共にした。しかし、わたしはそこで奇妙な噂を小耳にする。

「お前、タクミよりも俺のところに来て正解だったぜ」その男はベ

ツドから出て下着を履きながら言った。

「それはどういう意味？」わたしは訊いた。下に落ちた下着をベッドの中から手を伸ばして拾おうとするも、届かなかったのでそのままベッドに入りながら聞くことにした。

「タクミと付き合ってもすぐに捨てられるだけだったからさ」男は下着一丁でベッドの中に入ってきた。

「どうしてすぐに捨てられるのよ？」わたしはぶっきらぼうに言い、枕に深々と頭を沈めた。

男がわたしに密着する。肌と肌が強く触れ合って温かかったけど、わたしの心の中は鉛のようにひんやりとしたままだった。

「さっきまで岩木のようにだったのに、タクミの話になった途端にこれかよ」男がわたしの髪を所狭しと弄り始めた。わたしは吐き気を必死に抑制した。

「一時的にでも好きになった人のことだから気になるのよ」

「まだ未練があるのか？」男のごわごわとした手がわたしの耳たぶに下りてくる。

「好奇心に決まってるでしょ。未練なんて言い出したら、わたしには数え切れない程の後悔があるんだから」

男の唇がわたしの唇に重ねられた。それから間もなくして男がせせら笑いしだした。「あいつ、同時に体の関係を持つ女が五人もいるんだぜ。放課後誘っても断られただろ？ あれ、別の彼女同士を遭遇させない為なんだぜ」

わたしは唇を一文字に結び、黙り込んだ。ミヨがいた頃ならばきつと取り乱していただろうけど、その時のわたしは自分でも信じられない程に冷静だった。わたしの心にはもう温度というものが戻ってこない気がした。

二月十四日、わたしはタクミ君に無理を言っ放課後に学校の屋上に来てもらうことにした。

待ち合わせ時間よりも大幅に早く屋上に来たわたしは、錆びた金

網越しに下の世界を見渡していた。普段から見慣れた人間や飼育小屋、樹木などが玩具のように小さくなっており、腕を伸ばせば掴めてしまう気がした。グラウンドでは野球部やサッカー部がいつも通りに活動をしていた。他にも目を配れば、テニス部や陸上部も活動をしている。

それだけではない。今ここから見えないだけで、体育館ではバドミントン部やバレー部、バスケット部、柔道や剣道部などが活動しているだろうし、室内では文科系の部だって活動をしているだろう。わたしの知らないところでたくさんの方が生命が各々活動を行っている。わたしだって他人から見ればその内の一人にしか過ぎず、名前や存在だって知られていない筈だ。

そんな中からわたしを見つけ、選び、求めてくれたのはミヨだった。ミヨとわたしは本来交わることすらない筈だったその糸をお互い手繰り寄せ、結ぶことに成功していたのだ。わたしは結び目が解けてしまうことばかりに気を取られ、そもそも結ばれることが偉大だということを忘れてしまっていたのだ。

朔風が屋上の金網の隙間を通り過ぎていった。わたしは最近切つてない髪や制服のスカートがふわりふわりと舞うことなど気にせず、金網に寄り掛かって泣き続けた。乾いた屋上には北風とグラウンドの生徒たちの声だけが響いていた。

そろそろタクミ君と待ち合わせの時間だという頃、屋上の重い扉が鈍い音を立てて開いた。わたしのいるところと屋上の入口は垂直の位置関係なので、扉を押す手が最初に見えた。

わたしはすぐに違和感を覚えた。わたしの視界に映る手は、タクミ君のものとしては些かみすばらしかったのだ。ドアが完全に開き、髪や制服の裾が見えた瞬間、わたしはそれがミヨだということに気付いた。

久しぶり。元気にしてた？ ミヨがうつむき気味に言った。

「ミヨ」わたしは呟き、ミヨの元へと一歩を踏み出した。しかし、そこでミヨに『来ないで』と強く言われた。「ミヨ、どうして？」

もうわたし達が交差することはないわ。運命の糸は二度と結ばれないの。ミヨは相も変わらさずうつむいており、わたしからは表情が確認できなかった。

わたしはその場に立ち止まったままミヨとの会話を続けた。「ねえ、ミヨ。今までどこにいたの？」

ミヨは答えない。野球部がノックをしているのか、金属バットがボールと衝突する音に重なって「一、二、三」と数える声があった。わたし達がいる屋上の時間だけが物静かに停滞していた。

わたし達はもう交われないけど、それでも交わっていたという過去は残ってる。残滓しかなかったとしても、きつと何も起こらなかつたよりは良かったに違いないよ。ミヨがようやく顔を持ち上げた。目元から顎にかけて光る線が引かれていた。

それを見たわたしはいよいよ我慢ができなくなり、制止する声を無視して黄昏に染まるミヨの元へと駆け寄った。

わたしに触れちゃ駄目！ またわたしを手繰り寄せたら、あなたはとんでもないことになる！ ミヨが泣き叫びながら説得を試みるも、わたしは彼女の薄れゆく体を力の限り抱きしめた。

ミヨは無言のまま、わたしの腕の中で不確かな温もりだけを残して消えてしまった。わたしはガラス細工を扱うようにそつと瞼を下ろし、腕に微かに残る感覚を体に刻みつけようとするも、やはりそれは冬の寒風によって空高くへと連れ去られてしまった。

しばらくして、わたしは泣き腫らした瞼を持ち上げた。それとほぼ同時に、わたしの手に真っ赤でぬめりとした感触が生えてきた。

そして眼下には、血液をコンクリートに広げていくタクミ君の体が横たわっていた。それは高所から落下させられたトマトのようだった。

サッカー部が練習試合をしているらしく、頻りに掛け声が飛び交っている。この屋上以外の全ての人間たちは今尚、生命の音色を奏でている。

わたしはここに至るまでの全てをはつきりと思い出し、先程まで『ミヨ』だったタクミ君の身体をまた見つめた。タクミ君の顔には眼球が一つしか埋まっていなかった。

グラウンドから陸上部の笛の音がした。それが合図だったのか、わたしの時間もようやく刻まれ始めた。

わたしはまだ夜になれない夕空を仰ぐ。何かの予兆のように雲の隙間に紫色の輝きがあった。そこにわたしが喪失してしまったものがある気がした。

わたしはコンクリートの地面に仰向けに寝た。薄暮の中に身体が全感覚が吸い込まれていく。

わたしはぼつり、『ありがとう』と呟いた。

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5445g/>

残されたもの

2010年10月8日15時15分発行